

正論 一九七六年五月号

■極秘情報

鄧小平失脚

の意味するもの
モスクワ
香港ルートから

中嶋領雄 (書外語大助教授)

●揺れる中国の「走資派批判」

周恩来なき中国の動揺

華国鋒の首相代行は政治的決着がつかない状況での妥協人事、事務取り扱的なポストに就任したにすぎない——ソ連科学アカデミーの招待によるモスクワ滞在でのソ連側感銘をふまえ、現在、清華・北京両大学で吹き荒れている「第二の文革」ともいえるべき鄧小平を中心とした「走資派」批判の真相、そして首相代行、華国鋒の去就までを、中国研究の第一人者にズバリ推理してもらった。

いまから三、四年前、故周恩来首相が内政的には脱文革、対外的には「国家外交」への転換をはかって中国の政治と外交の第一線を担い、連日連夜まさに粉骨砕心の健闘ぶりを見せていたとき、もしも周恩来が毛沢東主席に先立って没するようなことになったら、中国にはきわめて不幸な、そして困難な事態を招来することになるかもしれないと書いたことがある。つまり、誰もが予測のなかに考えている毛沢東の死よりも周恩来の政治力の喪失の方が、より重大な結果をもたらすかもしれない、と考えたのであった。ところがやがて実際に周恩来の死に当面したとき、私自身はむしろ、当面の中国内政には大きな変動はないのではないかと展望した。その理由は、毛沢東以後への重大な歴史的転換期にある中国には、一時的には激動があっても、長期的・基



●“鄧小平失脚”の意味するもの

本的にはそのような移行期を順調に経過しようとするある種の政治的凝集力が働き、そのような状況のなかで、文革派、実務派、新旧実権派という三つのグループが拮抗しつつも、鄧小平を頂点とする後継指導者層が周恩来なき中国の政治的空白をすでに補填してきていると考えたからであった。私は、鄧小平を対象とする「走資派」への批判が激発している今日でも、なお基本的に右のような展望に立っている。ただ、今日の中国内政をみつめていると、政治動向の客観的考察を不必要にするほどの政治的・道徳的退行現象が表面化しているように思われ、そのような状況下ではいかなる論理的分析も有効性をもたないのかもしれない。このような退行現象は、そもそも社会主義的民主主義の制度的・組織的保障という政治の基本的枠組を無視してきた毛沢東政治の帰着するところではあるが、それにしても、一連の動きのなかに毛沢東夫人・江青女史の影が見えかくれしすぎるのは否めない。いよいよ中国は毛沢東家長体制の最後のとばりを江青女史

によっておろそうとするのであろうか。この点ではやはり周恩来なき中国の政治的空白が最近の動きを誘ったことは誰の目にも明らかだが、その動揺は周恩来の指導力・調整能力の欠在が招いたというよりは、周恩来の死に伴う政治的ポストの空白へ向けて角逐する党内の状況がそのまま流れこんだ結果であるような気がする。このような文脈からすれば、華国鋒の首相代行は、政治的決着がつかない状況での妥協の人事であったことは明白である。しかも華国鋒自身は当面の焦点に存在しなかった二次的リーダーであったがゆえに代行になり得たような気がする。華国鋒は一種の「事務取り扱い」的なポストに就任したにすぎないのであり、これをもって毛沢東後継者へのポストト入手したとはいえないであらう。もとより「事務取り扱い」がやがて本命になることはあり得よう。当面、行政の衝に当たる華国鋒が、その有利な実務的条件を利用して、名実ともに首相の地位を担う可能性もないとはいえない。ただ、そうなるまでには、まだまだ事態は

揺れ動くであらう。ともあれ、最近の中国内政の混迷を亡き周恩来はさぞかし深い憂慮をもって眺めているにちがいない。

「走資派」批判の意味

それにしても、周恩来の葬儀が盛大におこなわれた直後から、急遽、清華大学や北京大学の大字報を中心に、いわゆる「走資派」批判のキャンペーンが巻きあがったのはなぜであらうか。もとより、今日の中国には建国後一貫して党内闘争＝路線闘争が存在してきたし、とくに文化大革命以後には、林彪異変という深刻な事態を経過したのであるが、にもかかわらず、十全大会（一九七三年夏）以降も、つねに「潮流」と「反潮流」が内部で衝突し、さかまいていた。この場合、「潮流」とは文化大革命を脱文革（鄧小平に象徴される旧幹部の大量復権をふくむ）の方向へ志向させる流れであり、むしろその流れの方が奔流となりつつあったのであって、これにたいする「反潮流」が鼓吹され、「反潮流」こそ革命的であり、文化大革命の継続であるとされた

好評発売中!

新聞記者の 共産党研究

朝日新聞編集委員 鈴木卓郎

共産党スパイ査問事件は流血のリンチ事件か
あるいは特高警察のデッチ上げによるものか
あるいは特高警察のデッチ上げによるものか
共産党の輝かしい反戦闘争だったのか。共産
党の仮面と素顔に關心が注がれている今日、
第一線の専門記者が公正な視野から共産党を
解剖する注目の書 四六判 950円 千160

経済往来社

千160 東京都新宿区四谷4の11
振替東京129521 電話(357)0811

のであった。従って、十全大会後の「批林批孔」運動、昨夏以来の「水滸伝」批判、昨秋来の教育革命論争などは、いずれもこのような「反潮流」キャンペーンにはかならない。しかも、この「潮流」と「反潮流」との角逐は、これまでついに決着がつかずに、一連のキャンペーンはいずれも妥協的に終結してきただけに、「反潮流」を鼓吹する側は次々に新しい闘争材料を探してきては、反撃を継続してきたのであった。

ところで今回の「反潮流」運動は「走資派」批判として展開されている。「走資派」とは、かつて文化大革命の時期に劉少奇や鄧小平らが「資本主義の道を歩む当権派(実権派)」だと非難されたことに由来するレッテルであり、Capitalist Roaders と訳される。もとより、劉少奇にしても鄧小平にしても中国に資本主義を復活させようとは本気で考えているわけではないが、このような決定的な断罪の表現を冠せねばならぬほど、「潮流」の潜在力は大きいといえるよう。

去る三月十日付の『人民日報』は「巻き返しは、人心をつかむことができない」と題する社説をかかげ、「今回の巻き返しは党内のブルジョア階級が挑発したものであり、文化大革命とその後の各分野の成果を否定し、毛沢東主席とその路線、そして人民にホコ先を向けた組織的な攻撃だった」と述べている。この『人民日報』社説は、文革否定の「潮流」がいかに根強く組織的に潜在しているかを自ら物語っており、むしろそのような「潮流」によって文革路線は巻き返されつつあったことを暗示している。

今日の「走資派」批判は清華大学や北京大学の大字報を中心とし、やがて『人民日報』などのメディアにおいても点火された。したものの、鄧小平らの「走資派」が一挙に失墜するものかどうか、依然として状況は膠着し、拮抗しているように思われる。表面的には、「走資派」批判が激発しているものの、それは依然としてイデオロギイ・キャンペーンの域を出てはいない。「走資派」の側は、むしろ行政機構内部や

末端の生産点に潜在的な支持基盤を保持しているがゆえに、嵐の過ぎ去るのをじっと耐えているようにも思われる。しかも、中国をとりまく客観的諸条件を考慮すれば、たとえば工業化の課題や農業の近代化(機械化、化学肥料の普及など)といった当面の重要な諸問題をとって見たとき、中国にとって必要なのは鄧小平が示しているようなリアリスト党官僚のリーダーシップだとも思われ(これらの点については、本誌三月号の鄧小平未公開演説、参照)、ここに「走資派」の潜在力があるのかもしれない。

このような状況は、毛沢東以後の中国を目前にしつつある文革派にとってむしろ深刻な危機感を抱かせるものである。ここに今回の「走資派」批判の重大な背景があったものと思われ、もしも文革派が安定したリーダーシップを保持しているのなら、周恩来の死の直後の「走資派」批判という、あまりにも見えすいた、対外的イメージのうえでも損失の多い急旋回をする必要はなかったであろう。従って、今回の「走資派」

批判は、批判する側の防衛的な攻撃だともいえるのであり、ここに今回の事態の本質があるように思う。

それにしても、周恩来の葬儀が終わった直後から、「走資派」批判が活発化したことは、あまりにも見えすいたドラマではないか。周恩来という巨大な宰相の死を悼む論文や追悼記事ないしは周恩来の治績にちなんだ論文や記事が本来なら二、三か月にわたって掲載されるのが当然であるのに、それらの論文や記事のかわりに「走資派」批判が展開されているのである。しかも、確実な情報によると、天安門前広場の革命英雄記念碑のところを全国各地から相次いだ周恩来への献花は、去る二月十九日以来、

一切片づけられてしまっているという。今日、「党内のあの悔い改めない実権派」として糾弾されている鄧小平の主要な罪状が昨年後半以降の周恩来を代行していた時期のものであることに示唆されるように、「走資派」と周恩来路線との関連はほぼ明白になったが、それに加えて、周恩来批判の大字報が広州に出現したというニュース(二月二十九日香港「時事AFP」)を考慮すれば、やはり周恩来路線への批判も含意されているように思う。

いずれにせよ、冠婚葬祭にきわめて敏感な中国人の意識構造のなかで、世紀の宰相・周恩来の葬儀に際し、その弔辞を鄧小平が読んだ事実がもつ意味は絶大であった。

しかも鄧小平の弔辞は周恩来を哀悼しつつも、中国革命の経過を周恩来の事績に照して回顧し、総括しようなものであっただけに、こうして鄧小平が葬儀をしめくくったことを、文革派はどんな気持ちでながめていたのであろうか。もしも毛沢東が近い将来に没したなら、やはり同様に鄧小平が弔辞を読むのではないかと、彼らは反射的に考えたとしても、当然である。そのように想定し得る状況が存在したがゆえに、急速、「走資派」批判に火が点されたといえないだろうか。

鄧小平批判の性格
そもそも中国における路線闘争とはなに

●「鄧小平失脚」の意味するもの

か。文化大革命は、いうまでもなく毛沢東政治の典型としての「党内闘争の大衆運動化」という政治パターンの極限的な形態であったが、一般に路線闘争はきわめて強い権力闘争の性格をもちながらも、同時にいわゆる社会主義社会の建設方針や対外政策をめぐる政策論争的な色彩を付加させていることも否定できない。あるいは、党内の権力闘争を政策論争によってカムフラージュしているという見方も可能であろう。このような路線闘争は一般に「穏歩」と「急進」の対立ないしは「紅」と「専」の対立として描くことができるのであり、具体的には「政治第一」か「物質的刺戟」か、「階級闘争重視」か「経済建設重視」かといった問題として存在してきたのであった。

今回の鄧小平批判は、その端緒と本質においては明らかに「毛沢東以後」の指導権をめぐる党内の権力闘争であり、しかも「毛沢東以後」への不安を内在している文革派が発動したものであるが、やはり政策論争がそこに付加されて鄧小平の社会主

くの大衆は、むしろ鄧小平の主張の妥当性をこそ読みとるのではなからうか。ここにも、文革派の潜在的危機感があるように思われてならない。

ソ連はどう見ているか

今日の深刻な中ソ対立のなかで、毛沢東以後への不安を残す中国にたいし、ソ連がきわめて大きな注目を与えていることはいうまでもない。今日の中国の事態の責任をあげて「毛沢東一派」の仕業と見做すソ連として、周恩来路線や鄧小平の立場を評価しようとするのもまた当然であろう。このような一般的な背景のなかで、たとえば、「ソ連政府は一月下旬、北京のソ連大使館を通じて中国政府に抗議文を手渡したと伝えられているが、その内容は『中国は国際舞台や国内で反ソ攻撃を繰り返しているが、これは直ちにやめるべきだ。なお統けるなら、今後起こることの責任は、すべて中国側にある』と、かなり強い調子のものであったといわれる。この抗議の時期と内容などからみると、ソ連が、首相後継者選びがギ

義路線が「資本主義の道を歩む」もの、「翻案と後辟」（脱文革のまきかえしと旧実権派の復活）をたくらむものとされているのである。すでに新聞紙上でも報道されているとおり、鄧小平は毛沢東の三項目指示を要とする」といいながら「プロレタリア独裁理論学習」、「国民経済の発展」、「安定団結」の三つの指示を並列化し、「階級闘争がすべてのものの大綱である」という毛主席の指示にそむいて「文化大革命の諸決定をくつがえし、文化大革命の仇討ちをしようとした」と非難されているのである。（『人民日報』一九七六年二月二十九日付の梁効・任明署名論文「三つの指示を要とする」を評す」ほか）。数多い鄧小平批判のなかのもう一つのポイントは、昨年一月の全国人民代表大会で打ち出された経済建設重視の方針にかんがみ、鄧小平は工業、農業、国防、科学技術の「四つの近代化」を急ぎ、毛沢東の革命路線にそむいたとされていることである。このような鄧小平の立場については、私が本誌三月号（一九七六年）で鄧小平の未公開講話を紹介した際

リギリのところきていると判断し、鄧副首相を筆頭とする実務派にとって事態が有利に展開することをねらっていたともみられる」（『朝日新聞』一九七六年二月十八日）というような観測も存在したのであった。

私はたまたま、中国で「走資派」批判が巻き起こった二月中旬下旬の二週間、ソ連科学アカデミーの招待でモスクワに滞在し、もっぱら中国問題をソ連の学者と論議する機会を得た。東洋学研究所、極東研究所、社会科学術情報研究所など科学アカデミーの主要な中国研究機関での講演のほか、連日、各研究所・大学の研究者との意見交換論争にあけられた。

今回のモスクワ滞在中は、また中ソ関係史の第一人者であると同時に、グロムイコ外相のすぐ下で中国政策を立案しているカイピツァ・ソ連外務省極東第一部長（一九六九年の北京空港における歴史的な周恩来・コスイギン会談に同席している）や孫文研究で知られソ連外務省顧問として史料調査局長も兼ねているチフビンスキー教授（周恩来・コスイギン会談のちに実現し

に、きわめて堅実かつ慎重な「革命官僚」的リアリズムの立場だとして評し、別の論文では「六〇年代前半の経済調整期に『鼠をとるなら黒猫でも白猫でもいい』と発言して批判された彼が、最近もこの言葉を繰り返していることに示されるように、経済活動についてもきわめてリアルな客観的認識をもって」と述べたのであるが（拙稿「新太平洋ドクトリン」と中ソ冷戦」、「中央公論」一九七六年三月号）、このようなリアリズムこそ、「唯生産力論」、「経済台風」、「業務台風」、「利論第一」などの「修正主義的綱領」だとして激しく非難されているのである。しかし中国が今日解決を迫られている内外の諸課題を冷静に分析すれば、国内の工業化、農業の機械化、国防・科学技術の近代化を中心とする近代的な経済体系の整備・建設の方向——このような方向に向けて周恩来指導型の内外政策の歴史的転換が七〇年代前半にはかられたのであった——こそ、中国にとってはや後戻りできない社会的・国家的要請だと思われるだけに、鄧小平批判の罪状のなから、多

た一九六九年の中ソ国境会談に参加）ら、中国政策の第一線に立っている人びととも長時間にわたって会談することができた。このような交流を通じて私が得た印象としては、少なくともソ連の党・政府機関に近い人びとの中国情勢についての見方は、当面、上海グループが毛沢東の衣鉢をかついで勢力を得るだろうと見做し、張春橋をやはり文革派に位置づけて注目していることであった。カイピツァ氏は、鄧小平らが一種の集団指導によって後継体制を担う可能性を絶対的に否定し、後継体制は「ワンマン、プラス集団指導」だといって、そのワンマンは上海グループから出るだろうと主張した。首相代行の華国鋒もこのグループに位置づけられているが、華国鋒よりもやはり張春橋に注目しているようであった。従って、このような展望においては中ソ関係が当面改善されるとはいささかも見なさず、昨年末（十二月二十七日）の中国によるソ連のヘリコプター要員釈放事件（中国側は、従来のスパイ容疑を訂正し、そのうえ釈放に際しては彼らを招安した）も、中ソ

正論

時効は 免罪符ではない やり得を許すな

正義感情を崩す

大正七年八月十七日、一人の殺人犯が刑場の露と消えた。石井藤吉。享年四十七歳であった。彼は、もし自分の犯した犯罪のために無実の男が処刑される事態を黙って眺めていることができたならば、生きていくこともできた。犯罪に始まり犯罪に終わった生涯のほぼ半ばを彼は刑務所で過ごした。たまたま、「鈴ヶ森お春殺し」の犯人としてお春の情夫が捕まり、死刑を宣告されたことを耳にしたのも、彼が窃盗の嫌疑で警察に留置されていたときのことであった。

「それは、私のやったことだ」という彼の自白を裏付ける



さとう ぎんこ
佐藤 欣子
(法務総合研究所・研究官)

ことは困難であった。第一審裁判所は本人の自白にもかかわらず、彼に無罪を言渡した。しかし控訴審は第一審の判決をくつがえし、死刑を宣告した。死の直前まで書き続けられた彼の手記はアメリカの宣教師の手によって英訳された『刑務所のジェントルマン』として、世界に紹介された。

その中で藤吉は裁判について、次のように述べている。「控訴審で私は全く公正な裁判を受けることができず、それは無実の者を死刑から救ったばかりでなく、私の魂も救ってくれたのです」

ひとたび犯罪が犯されれば、国家の刑罰権が発生する。犯人になぜ刑罰を科するのか、つまり刑罰の目的や本質に關しては、周知のようにさまざまな議論がある。また刑罰

和解へのシグナルどころか、ソ連の一貫した正しい政策の結果、ついに中国が折れてきたのにすぎず、中国が西側諸国へのプロパガンダのために、この事件を利用したのだとみなしている。

もつとも、東洋学研究所などの学者サイドには、以上のような見方とはトーンが異なっており、長期的には実務派が優位に立ち、その場合には中ソ関係にも一定の改善があり得ると展望する人びとも多かったように思う。

ただ、当面毛沢東以後へ向けて中国の党内闘争はますます深刻化するであろうし、今日の党内闘争は同時に中国の社会的・政治的矛盾の反映であるという点ではソ連の人たちのすべてが一致していた。

「走資派」批判のゆくえ

私はモスクワからの帰途、テヘランを経由し、香港にも立ち寄った。さすが香港だけあって、書店や街頭でははやくも華国鋒をめぐる内幕物の小冊子、手早くも鄧小平を除外した新しい権力者群にかんする小冊

子などが派手に売られていた。今回、華国鋒の首相代行就任を最初に伝えたのは香港の中立右派系紙『明報』であり、中国は最近、内部情報を意識的に香港の非中国系紙に流していると思われることもあって、香港の観測家たちは、このところいささか興奮気味である。しかし、香港の権威筋は、文革時に比較して、今回の「走資派」批判はその根深さと拡がりにおいて限定されていると見ており、このまま「走資派」が根こそぎ打倒されるとは見ていないようであった。

たしかに今回の事態を冷静に見つめると、やはり主要な舞台は、大学の大字報、『人民日報』ほかのマス・メディアであり、運動が全中国的な拡大をみせているとは思われない。

二月二十七日の新華社電は農村でも「走資派」批判が展開されたとして山西省大寨大隊の例を伝えていたが、ここは周知の全国農業模範地区である。人民解放軍では、瀋陽部隊の例が報じられたが(北京放送、三月五日)、ここも人民英雄・雷鋒を生んだモ

デル部隊である。

むしろ、人民解放軍総参謀長をも兼務することになった鄧小平の軍内での影響力は、旧第二野戦軍(鄧小平は第二野戦軍の政治委員であった)系統の軍人の台頭という林彪異変以後の状況に照して、少なくとも上海グループよりは大きいと思われる。しかも、林彪異変という教訓を得た軍が、今日の路線闘争に安易に介入するとは思われない。

このあたりにも「走資派」の潜在力があるのだとしたら、事態はまだ当分膠着状態をつづけるであろう。たとえ鄧小平が失墜しても、毛沢東以後の時期における再復権も考えられよう。

果たして三月十一日の共同電は、鄧小平が深夜、清華大学を訪れて自ら大字報を読んだ、との情報を伝えた。この情報が事実なら、状況は文化大革命当時とは大きく異なっている。

鄧小平は果たして失脚するのであろうか。まだまだ早急な結論はくだせないように私は思う。